

家庭科の男女共修をすすめる会

会報

'77

秋

連絡先

東京都渋谷区代々木二二二ー二一
婦人会館内

〒151

発行 一九七七年九月十四日

共修をすすめよう

和田典子

さる六月八日、文部省は小・中学校の新しい学習指導要領案を発表し、各方面の意見をきいた上で二、三の修正を加え、七月二十三日正式にこれを告示しました。「案」に対する意見書は、日教組をはじめ教道府県教組、民間教育団体などから数多く出され、家庭科については本会でも集会での討議をふまえて意見書を提出いたしました。ところが取り上げられず、「案」の問題点は残したまままで告示され、問題は今後にもちこされました。けれども、新指導要領が実施されても、共修をすすめることは不可能ではありません。『地域や子どもの実態に即した弾力的運営』という指示を武器にして、ほんとうに成果のある現場実践をつみ上げてゆくことがたいせつだと思っています。

集会のおしらせ

中学で家庭科の男女共修をすすめることにしました。
するためには、技術科との関係をどうするか十分研究しなければなりません。
そこで次の集会には技術科の専門の方を講師として招き、話し合いを

テーマ 中学の「技術・家庭科」の共修をどうすすめるか
講師 技術教育研究会 原正敏氏

もくじ

共修をすすめよう	(1)
集会のおしらせ	(1)
七・二集会報告	(2)
文部省に要望書	(5)
世話人会報告	(6)
福井から「共修をすすめる会」についての調査と勧誘始末記	(7)
東京都のうごき	(9)
「婦人問題を考える」対話集会に参加して	(9)
都「婦人問題会議」で意見を述べて	(10)
会員の状況	(11)
中教審の新メンバー決まる	(12)
世話人異動	(12)
共修問題・久しぶりにテレビで	(12)

とき 一〇月八日(土)

午後一時半～四時半

ところ 婦人会館(電話三七〇一〇二三八)
小学校、高校、大学の先生、一般の方々もぜひご参加の上、いっしょに考えてくださいま
すように。

七・二集 会 報 告

夏の号でお知らせしましたように、七月二日、小・中の新指導要領を検討する集会が開かれました。和田典子さんのいいいな報告のあと、熱心な討論が行われ、文部省に要望書を提出することが決められました。

報告要旨

新学習指導要領

(小・中)を検討する

和田 典子

A 改訂の基本的方向

1. 「答申」の忠実な具体化

一言でいって昨年の教課審答申が忠実に具体化されたものであるといえます。従って、答申に対して、いだいていた疑問や危惧が現実のものであったことを、改めて思い知らされるわけでもあります。

たとえば「家庭科は体験的学習教科としての性格を確立する」とは、つまり物づく

りややり方を習う教科に徹する、ということであるとか、「内容の精選、構成の改善」とは、扱いにくい教材を削り、子どもの力に応じて水準を下げることであるとか、「男女の履修方法の関連をみつね」とは、男女共修をやらうと思えば、やれる余地を残しておくとか、いうことであって、そのことの教育的意味とか社会的課題とかを検討し直して、内容の再構想をはかろうとしたものとは考えられないということです。物づくりを通して、どんな力をつけるのか、そのなかで子どもたちに認識させる原理なり法則性なりは何なのかといった内容や男女共修のもつ教育的意義などをあきらかにしていないということです。

2. 基本的な性格は

したがって、基本的な家庭科の性格は現行のものを、そのままひきついで家事・育児に関する実用的な知識・技能のあれこれを、万遍なく経験させることを主題にしているということです。小学校の内容にも「〇〇ができること」が増えて「考えること」とか「理解する」などの項目が大幅にへっているのもその

の現れの一つです。

3. 記述が簡略になった

各教科にわたっていえることですが、家庭科の教育内容も項目数が減少(大項目、中項目までにとどめて小項目の記述を省略したため)して、一見、「軽減」されたかに見える。頁数では9頁分が4頁にへり(小)項目数では三〇〇項目が七〇項目にへっています(中)。理由は前に述べたためと中学校では時間が一、二年で各一時間へったためですが、そのなかで省略されていない部分も残っており、それが「製作」「実習」に関するやり方の内容項目というわけで、このあたりに今回の改訂の基本的なねらいがあらわれています。

4. ゆとりは生まれぬ

このように記述が減少したために内容が精選されたような錯覚を生じますが、内容にわたって向よく検討してみますと、そのようにはなっていないことが判ります。殊に「〇〇ができること」が求められれば今の条件で、いまの子どもの状況からいって、容易でなく精選でも軽減でもないことはあきらかです。中学校についても時間がへったことに加えて領域はむしろ拡大しますから、これまで目まぐるしくあれこれの領域にわたって手がけることになり、基本的なことをじっくりとわか

るまでやることは無理です。

B 男女共修の可能性は前進した

このことは、わたしたちの運動の成果として評価できる点ではないでしょうか。技術・家庭の二系列とも、男女共修の可能性は大きく前進しました。現行の「男子向き」「女子向き」による学習内容の区別はとりはらわれ、両系列は一括してA-Iの17領域として提示され、そのなかから7領域を履修することに改訂されました。もちろん男・女では指定されるのがA-E、F-Iと別領域になっていきますので、そこに大きな制約はあるのですが、とも角、この枠内でも技術・家庭科を全面的に共修にすることは可能です。

たとえば、

一年(0) 木材加工(1)、被服(1)、食物(1)

二年(0) 機械(1)、栽培、住居

三年(0) 機械(2)、電気(1)、食物(3)、保育、のよう編成すると、指定領域もこなしながら全学年にわたって男女共修が実現できることとなります。

しかし、これではあまりにひどい「コマ切れ」ですから、内容的には「やった」というだけで、真の学力が得られるかどうかは疑問です。三年間で七領域というのが限界だと思えますから、指定は共通部分についてすべき

なのを、男女別領域指定というところに無理があるといふべきでしょう。

しかも、答申では四領域であったものを、さらにふやしているのは問題です。しかもその責任を現場に転嫁しているのですから、許せません。わたしたちは、男女別指定領域の不合理性を実践的にあきらかにしながら、指定領域の削減、共通指定領域の実現を目ざして今後のとりくみを強める必要があります。

6. 教材編成の部分的手直し

小学校の教材編成には、教組教研や民間研究の成果をくみ上げた気配がよみとれます。たとえば「食品群」とか「身なり」「しみぬき」「台所の動線」「応接・訪問」など、現場から批判の多かった題材がカットされ、自主編成の成果がみられた「小物」「エプロン」「間食」「ごみ処理」などはあらたにつけ加えられました。中学校一年の被服教材からブラウスを削ったこと、全学年にわたって「食品群別摂取量のめやす」をカットしたことも、民間からの批判にこたえるものといふべきでしょう。

B 残された問題点と今後の課題

(1) 小学校の領域を縮小するため「住居」と「家族」を統合、圧縮したことは問題だと

思います。

現在、「すまい」と「家庭」の問題は国民的に深刻ななやみになっています。また「物づくり」といった体験とは結びつかないとしても、調査、観察、記録、などの実体験を手がかりにして、すまいの必要・十分条件を学んだり、現状や問題点を知ることが、小学生は小学生なりに可能はずです。現行四領域を改訂する必要は認められないし、家庭の荒廃という現実的な課題からいっても、むしろふくらませたい内容といふべきではないかと思えます。

(2) 小学校の内容に食品、糸、布、などの材料学習を取上げていない点も問題です。子どもたちは、これらの材料について経験することが日まに困難になっています。つくる以前の教材であり、つくるための基本となる材質把握の上からも欠かせない教材である上、現実課題としても問題が増えています。

(3) 献立調理と型紙洋裁

日常生活の流れとしては、たしかに献立↓買物↓調理↓配膳という順序があります。また、洋裁にしても採寸↓原型製図↓裁断↓縫製というような本格的な洋裁は、過去のものとなりつつあります。

わたしたちが、生活上の実用性を求めて調

質疑討論

質疑・討論では主に技術科の問題に集中。

「女子の家庭科は高校まで一応つながつているが、男子の技術科は中学にポッと三年間あるだけ。どうにかしなければ技術科の面が生きない」「普通教育の中に職業教育を位置づけようとする方向がある」「企業サイドに立った技術科の誕生―三十三年改訂が大問題。民主的な技術家庭科とは?」「技術の先生は有資格者が少ないのでひっぱりだこ。本校では来年から共修にするが、技術科の先生『担任をする時、不都合で、女の子にも教えない』の弁。技術の先生はどのように養成されているのか?」「家庭科の先生は木工、金工をやらねばならないが、学ぶ場は?」「無免許がほとんどで、教える事は非常に難しい」……など。会として新たにこの問題を討論し合うことになりました。

他に「大学では食物、被服とわかれながら家庭科は両方含む。教育免許状の出し方がまちがっている。家庭科って何?」「女子は家庭科をしっかりやっておかねば困るぞという高校の指導要領からのしめつけがあると共修はさらに難しくなる。今後の高校指導要領作

理や洋服をおこなう場合なら、中学校の被服、食物の内容はそれに見合うものかもわかりません。しかし、家庭科教育(被服教育、食物教育)として取り上げる内容となれば問題は別です。既製・市販の型紙を使ったのでは、衣服の構成原理や型紙そのものが判らない、つまり衣服が作れるようにはならないからです。同様に、調理の経験のない、食品知識もない子どもにいきなり献立は立てられないからです。いろいろな料理を知った上でそれらの取り合わせも考えられるというのが実情です。

「性」を題材にして妊娠・出産の生理や婚姻法などは、年令からいっても中学生の男女にとって有効な教材になることが、既に数多く報告されているのですが、無視されています。

(5) 被服教材を限定した意味は何か

技術系列にくらべて、被服教材だけがスモック、スカート、パジャマ(しかも型紙洋裁)と特定しているのはきわめて不可解です。もっと自由に、作業着、休養着などの教材は選べるべきではないでしょうか、なぜこれだけ进行固定したのか明らかにしてほしいのです。

(6) 今後のとりくみをどうするか。

共修の可能性をできる限り追求することが第一です。そのために指定領域数の削減をちかとりたいたいものです。「分割授業」や教師定員増、施設・備の充実などの教育条件をよくすること、研修権の行使をいっそう自由に発展させることなどが欠かせない前提条件です。

このように考えますとき、献立→調理、型紙・洋裁といった実用性優先子ども不在の教科課程では、子どもに力をつけることはできないので、問題なのです。

これと類似した教材の取扱いは随所にみられます。子どもの順次性、興味、関心に即して題材を選ぶ視点をもっとも強化する必要があるとあります。

(4) 中学校でも「家族」領域が欠けています、また「保育」領域ではやはり実用的視点から幼児を対象にして内容が編成されています。

しかし、中学生にとっては「保育」よりもはるかに「家族」の学習が適しているのでは

成をチェックしなければ」更に「教師、家庭主婦の意識を高めることが必要」「一般の人達が共修にどういう事を望んでいるのかおさえておく必要がある」等、活発な意見交換が行われ、最後に「この会は、色々な立場の人達が集まるのが魅力。でも一般の方や男の方の出席が少なくなってきた事は残念だ。回りの人達に声をかけあって出るようにしよう」の呼びかけがありました。(馬場洋子)

文部省に要望書

七・二集会で出された意見を中心に、世話人会で次のような要望書を作成、関係方面に送りました。

要 望 書

家庭科の男女共修をすすめる会では、教課審答申(審議のまとめ段階)でも多くの要望を提出したが、必ずしも十分な配慮を得られなかった。

今回、学習指導要領(案)小学校・中学校が発表されたが、これを検討した結果、前回指摘した点が、いっそう明確な矛盾となって表れてきていることが確認された。この学習指導要領が今後相当長期間学校教育の方向づ

けをする重要さにかんがみ、改めて以下の点の抜本的手直しを学習指導要領に盛り込むよう要望するものである。

一、今回の学習指導要領(案)は、家庭、技術・家庭とも全体の項目について技能偏重の感をまぬがれない。家庭科には「生活」についての基本的な知識や技能を得させる課題があり、技能からのみ正しい生活認識が導かれるものではない。この点の抜本的改善が必要である。

一、とくに、小学校・中学校とも「家族」の領域が確立していないのは問題である。中学生はしだいに社会的認識が育ってくる重要な時期であり、その場合、「保育」より前にまず「家族」を学ぶ必要があるのは当然である。

一、中学校で男女の学習形態・内容の密接化が打ち出されたことは望ましい方向である。しかし、これを実質的なものにするには、男女別の領域指定でなく、男女共通の学習領域を指定する必要がある。その場合も、技術2、家庭2程度に領域を整理することが求められる。

一、もし、今回の(案)のまゝの指定領域数で中学校の男女共学が行われたとすると、学習内容は総花的に分散されざるを得ない。これは必ずしも学習成果を保障するものではない。なお、男女とも技術および家庭を学ばせるには、少なくとも現行の授業時数は確保するべきである。

一、次に発表される高校の学習指導要領が、中学校の共学をさまたげないよう配慮されたい。

一、中学校における食物領域の献立学習、被服領域の型紙学習は、十分な教育理論を持たないものであり再検討が必要である。

以上

昭和五十二年七月二日

家庭科の男女共修をすすめる会

殿

代表 市川房枝

世話人会報告

(六月八日)

六月八日夕方、七月二日の集会についての世話人会を行いました。まず、会費を徴収してはどうかという意見があり、会員は百円、非会員は会報込みで三百円に決めました。次に、集会案内状は五百枚印刷(担当・青木)し、東京近郊の家庭科の教師宛に六月二十日までに発送(駒野、和田)する、マスコミに集会の宣伝は会報の発送と電話による掲載要請(駒野)をすることにしました。なお、当日の受付は馬場、水野、八島、報告者は和田典子、佐藤慶子、司会は中島、半田、記録は馬場に決定済みでした。

また、集会に関連して、会として学習指導要領に対する要望書を作成し、文部省に提出することに決めました。

そのほか、福井の八百山和子(会報7夏六頁参照)の世話人を決め、アビール文と申し込み用紙が不足してきているので、B5判の大きさ、タイプまたはタイプオフで五千部印刷することにしました。

(青山和世)

(七月二日)

研究集会后、世話人会では、集会で出された意見をまとめて指導要領(案)について文部省へ出す要請文の検討を行った。

①中学校の指定領域を減らし、男女共通必修のものを技術系列・家庭系列ごとに各学年一・二にしぼる。(「家族」を加える)

②小・中とも衣服は型紙方式をやめ、教材は地域の実情にあわせて決める。

③食物は、小中の統一と一貫性をはかる。献立学習は総合的でむずかしいので、たべた食事の内容を分析する形にする。

④住居は社会的視点で問題性を考えさせるなどの内容をもりこんで、一両日中に要請文を作り文部省へ提出。(担当 佐藤)

次期集会については、集会で提起されたように、中学校の技術科とどう連携していくかをテーマとすることに、一ページ集会お知らせのような内容が決定した。なお引き続き、都や校長会との会談の交渉もすすめる。次回世話人会では記録集出版について話しあう予定をきめた。

(駒野陽子)

(七月二七日)

七月二七日(水)の世話人会(於渋谷)では、以下の点を決定した。

次回集会は、今後の中学校技術・家庭科の共学をめぐる、原正敏東大教授と産業教育研究連盟の向山氏(予定)を迎え、十月八日(土)開催予定。

懸案の、家庭科の男女共修運動三年間の記録集「家庭科、なぜ女だけ」(仮題)は、いよいよ八月二十五日原稿〆切、十一月刊行予定(定価千円程度)。内容は、最初に、共修の会が生まれるまでの当時の状況、そして、中心は運動のひろがりにもなって展開していったさまざまな議論や期待をいくつかに集約、そして、最後に、今後への展望、これまでの活動資料をつけ加えたものになる予定である。発行部数は当初二千部を考えている。

なお、現在婦連会館にある事務局の運営は田賀愛子さんと四人の世話人が週一・二度行なって事務処理をしており、八月末に処理方式の話し合いを持つ予定。

(佐藤慶子)

福井から

「共修をすすめる会」についての調査と勧遊始末記

福井県世話人 木村 温美
八百山和子

四月はじめ、半田世話人より手紙が来て、福井県では会員が二名しかないので会員をふやしてほしい旨がしたためてあった。

家庭科教育にとって、今こそ天下分け目の重大な時期に、いったい当事者の先生方はどんな意識をもって行動しておられるのか、と

いうことの一端を知るにもよい機会だと考え、共修をすすめる会の勧誘と、会についての態度を知る質問調査とを兼ねて行うことにした。

1. 誘いの手紙
左上のとおりである。
2. 質問調査票
左下のとおり。但し、大学短大家政学関係者計十一名へは調査票の番号4の項目(家庭科の免許状について)は抹消して配付した。
3. 配付数

福井県教職員録(五十一年度版)に収録されている中学技術家庭科女子向き担当者及び高校の家庭科担当者全員をひろい出し、明らかに

五月末日までに返送されてきた回答は五十分、回収率は二十五%であった。

新学期早々であり、配置転換直後で本人の手にわたるのがおくれたり、或は旧任校にそのままになっているものもあると思われる。時

結果および考察

1. 回収率

五月末日までに返送されてきた回答は五十分、回収率は二十五%であった。

新学期早々であり、配置転換直後で本人の手

様 1977年4月

陽春の候、あなた様にはお元気でおつとめの事と拝察いたします。

さて本日は「家庭科の男女共修をすすめる会」におさそいのためのお便りを差上げます。

この会は別添資料で大体御推察いただけますように、中学・高校家庭科女子のみ必修が、男女の教育の機会均等を阻み、男子の日常生活における自立を妨げ、さらに男女の役割固定観を助長するものとして、この制度を改め最少限度人間として必要な個人及び家庭生活に関する知識と技術の教育を、共修の家庭科で実現すべく働きかけようというものであります。当面の目標は次回の教育課程改訂に本会の意図が盛り込まれるよう、会員の研究及び運動を行うことにあります。

なにとぞ本会の趣旨に御賛同下さいまして、御入会いただきますようお願いいたします。

御便宜のため振替用紙を同封いたしました。

なお、同封のハガキによる質問調査に御協力の上20円切手を貼り御投函下さいますよう、併せてお願いいたします。

家庭科の男女共修をすすめる会世話人
木村温美(福井大学教授)

家庭科の男女共修をすすめる会(アンケート)
次の質問に対するあなたの答を○で囲んで下さい。

1. 「家庭科の男女共修をすすめる会」の存在を
知っていた・知らなかった
2. この会の主張は
賛成・理想的だが非現実的・不賛成
3. この会に対して特に重点的にやって欲しいことを3つ○をつけて下さい。
イ. 自治体、学校ごとに働きかける
ロ. 次の教育課程改訂での実現をめざし、文部省や関係者に働きかける
ハ. 共修の参考になる研究や情報を交換する
ニ. 共修問題の関心を高めるため広く社会の各層に働きかける
ホ. 同じ目的をもったグループの輪をひろげる
4. あなたの持っておられる家庭科免許状は?
一級・二級・臨免 です。
アンケートにご協力下さりまして有りがとうございします。お手数をおかけしますが、切手をはって投函して下さい。

期を考える必要があると感じた。

2. 会の知名度と反応

既に会の存在を知っている人と、調査票を受けとってはじめてその存在を知った人とはどのような反応が表1でわかる。会の存在を知っていた人が、わざわざ切手をはって投函した二十五名のうちの六十四名というものであるから、調査対象全体からみれば十六名ということで、これを少ないとみるか、或は六十四名のほうを高く評価するか、見解の分れるところである。

表1. 会の知名度と反応との関係
()はパーセント

	知っていた	知らなかった	計
賛成	25	13	38(76)
非現実的	5	2	7(14)
不賛成	1	1	2(4)
無答	1	2	3(6)
計	32(64)	18(36)	50(100)

しかし、会の存在を知る知らぬにかかわらず、「会の主張に賛成」が七十六名と圧倒的に多かったことは心強いことであった。

3. 会の知名度と所持免許状の種類

免許状の一種と二級では、取得専門科目単位数に倍の開きがあるから、一応専門性の深淺による関心の度合いを調べてみたのが表2である。

しかし、この点については一級二級共に同じ傾向であった。この二級所持者というのは高校で教えている人が中学の一級をもっている二級とだけチェックした人もあることも

表2. 免許状の種類と会の知名度との関係
()はパーセント
注 大学6名を除く

	知っていた	知らなかった	計
1 級	17(65)	9(35)	26(100)
2 級	9(64)	5(36)	14(100)
臨 免	1(25)	3(75)	4(100)
計	27	17	44

考え得るのであまりはっきりしたことは言えない。

それよりもこの表で新たに気付いたことは、一級免の割合が、予想より多かったことである。去る一九六九年春、木村が福井県下の中学校技術家庭科女子向き担当教師全員一三三名に対する質問紙調査を行った際、回答六十七名の所持免許状内訳は、一級四十三名、二級四十九名、仮免七名であった。今回の中高教員合計では一級五十九名、二級三十二名、臨免九名である。まだ福井県全体の資料を調べていないから(この種の資料は閲覧許可がとりにくい)果して現状も一級所持者の割合がふえたのか、或は切手をはって返信を出す意欲のある人が一級所持者に多かったのか、今後の検討課題である。

表3. 会の進め方重点事項

重点事項	希望した数	%
イ	9	8
ロ	32	28
ハ	29	26
ニ	26	23
ホ	17	15
計	113	100

(会報'77春P2の運動のすすめ方についての案の1~5をイ~ホとした。
質問紙の3を参照)

4. 会のすすめ方に対する意見

表3のような結果であった。

すなわち、僅かな差をもって一位は文部省その他の関係者に働きかける、二位共修の研究や情報を交換する、三位広く社会の各層に働きかける、となっている。イとホはどちらも自分の職場や同じ目的をもった者に働きかけることを意味しているが、これらがいずれも低率であったことに考えこまされた。「やってほしいこと」という前提はあっても、やはり自分の身におきかえて「もし自分が実行するとしたら」という気持ちで記入するであろうと思われるから。「あまり身近なところへ働きかけていると、何か色眼鏡でみられはしないか? 何か思想的背景など痛くない腹をさぐられるのは迷惑」というような警戒心が働いたような気がしてならない。このような勘ぐりを裏付けるものは質問紙の応答とは別に来たハガキや、途中で逢った卒業生の言葉であった。例えば「個人としては賛意を表すが今の立場上入会はできない」とか、「自分も卒業して約十年、理想にばかり走っていては...」とこのあとは現場での女性差別のきびしさと、そのゆえに目立つことや現状に楯つくことによるしっぺ返しなどを暗にほめかしたなどである。

5. 入会見込み数

はつきり「入会する」と添え書きのあったもの三名、「賛成」として住所氏名の明記しであったもの八名であった。質問票は無記名式であったから、これらの方々の入会は見込まれると判断した。この判断が正しいことを祈りながらこの始末記を終ることとする。

東京都のうごき

東京都主催
「婦人問題を考える」対話集会に
参加して
中嶋 里美

七月十二日都庁第二ホールで東京都民生活局婦人計画課主催の「婦人問題を考える」都民対話集会が開かれました。都側からは美濃部都知事をはじめ、関係する局長や部長、婦人問題会議委員が三〇名近く並び、参加者は三百余名とのことでした。これは、東京都行動計画を作るにあたって都民の声を反映させることを目的としたものです。

都知事から都における男女差別を解消し、憲法の精神を実現させていきたいと挨拶があり、続いて、労働、教育、家庭、福祉の問題

毎に意見が出されました。

私は学校教育の中で徹底的に男女平等教育をすることの必要性を述べ、とりわけ教職員が男女平等について学ぶ必要があることを具体的な例を示しつつ述べました。家庭科の男女共修については、白鷺高校の佐田彌氏も所属している全国高等学校長協会家庭部会では反対決議をしているが、これは国際婦人年や憲法の精神にも反する。是非東京都としても、こうした人達と討論をし、共修にするよう努力して欲しいと要望してきました。

私の意見の後も親や教師の中にある、男女について偏見をなくさせる必要があるという意見が続き、都知事の方からは、男女平等を阻害しているもの一つに家庭がある。母親のためにも、子供のためにも集団生活がよ

したのではという提起もありました。

東京都

「婦人問題会議」で意見を述べて

半田 たつ子

美濃部東京都知事は、六月一七日の記者会見で、政府の国内行動計画を「具体性に欠ける」と批判、都独自の行動計画を立案することを発表、二〇日には知事の私的諮問機関として「東京都婦人問題会議」を発足させました。自治体が独自の婦人問題行動計画を作るのは、全国でも初めてであり、しかも会議委員に対して知事は「都における男女差別解消のため、革新都政にふさわしい計画策定のため、基本構想について貴重な答申をいただきたい。答申に対しては忠実な実施計画を立てるため、全庁あげて取り組む。そのための庁内体制を整え、区市町村とも連絡をとっていただきたい」と挨拶したということです。

会議委員は二十八名(女19、男9)で、会長―鍛冶千鶴子、会長代理―松原治郎、「参加・教育」部会長―樋口恵子、「家庭・健康・福祉」部会長―松原治郎、「労働」部会長

―塩沢美代子の各氏が選ばれました。

この参加・教育部会の第二回会合が八月一六日開かれ、参考人から意見聴取を行うというところで、本会から半田が出席しました。他には、国立市公民館の伊藤雅子氏、東京ボランティアコーナーの渡辺松子氏、目黒内職友の会の秋山美枝氏、家庭教育学級さなみグループの岡田京子氏が呼ばれていました。

出席していた委員は、樋口恵子、金森トシエ、神田道子、山口真、山口みづ子の五氏で、いずれも家庭科男女共修について深い理解と賛同を示す人ばかり。会議は公開であり、各局の行政連絡の上から設置された「東京都婦人関係行政推進協議会」のメンバーであるお役人も多数出席していました。そこで、私は、むしろ行政の立場の人に訴えたい、と前置きして「国の行動計画のような抽象論ではなく、家庭科男女共修を都の行動計画に、明確にうたげてほしい。行政は、具体的な施策を構じてほしい」と述べました。また、教育庁指導部長に「時代錯誤の女性観を持ち、教育を開かれた市民の場で議論することをいとう都立高校長がいるが、適切な指導をしてほしい」と要望しました(部会長の樋口さんから、都立白鷗高校長佐田重氏も呼びたいと聞いており、大変おもしろく楽しみにしていたのに、かな

えられなかったのは残念でした)。

教育庁指導部長は、「初歩的な質問だが」と遠慮がちに「男女の特性をどう考えるか」と質問(また特性か)と思いつながら答えましたが、婦人青少年婦人計画課長(女性)がしきりに私の発言にうなずいていたのが印象に残りました。

「参加・教育」部会の委員は、一番ヶ瀬康子、奥平康弘、金森トシエ、神田道子、佐藤エ、樋口恵子、室俊司、山口真、山口みづ子の九氏。女性委員はもとより頼もしい方ばかり、室氏は本会の賛同者、奥平氏は憲法学者。佐藤氏の家庭科観はまだうかがったことがありませんが、いずれにせよこの委員の顔ぶれなら、都の行動計画は大いに期待したいところです。ただ、当日は男性委員が三人とも欠席で残念でした。

都の婦人問題会議は、都のお知らせ版を通じての広報活動や、会議委員も加わったの公聴会開催、世論調査、対話集会なども開催するという開かれた運営にするようで、大いに期待と関心を寄せて見守っていききたいと思えます。総会は年四回、専門部会は五回開き、本年十二月には中間意見報告を、来年三月末には最終答申を行うということです。

会員の状況

八月六日現在

会員は、八月六日現在で三六〇を越えました。最年少は、東京の内田幸一君。高一です。彼は中学生の時から集会に参加し、熱心に発言してきました。青木茂・淑子、佐々木保行・宏子、高見寿・京子各氏の夫妻組、久後波満子・藤井明子、谷中千恵・梶谷典子各氏の親子組、和田典子・藤本了江両氏の姉妹組もあります。

東京・神奈川・熊本・埼玉の四県で、会員の半数を越えます。熊本は高校の家庭科の先生が集団で加入、会費もまとめて納入して下さるという優等生。近畿地区では関西グループが活発に行動しており、この会と両方に属す会員もあって熱意に打たれますが、男女共修の家庭科実現の先達である京都府立高校の先生が一人も会員でないのはさびしい限りです。日々の実践に全精力を傾けておられるとはいえず、全国的な運動の広がりと、あなたの授業とは無縁ではないはず。ふるって会員になって下さい。

東京・神奈川・埼玉の教師の人数は四九

会 員 数	都道府県名
14人	東京
30	神奈川
25	熊本
19	埼玉
16	愛知
10	長野、新潟、兵庫
9	岐阜、大阪
8	宮城、茨城、福岡
6	石川、福井、京都
5	静岡、三重、島根
4	秋田、栃木、千葉
3	高知、大分
3	北海道、岡山、広島
2	山口
2	岩手、福島、徳島
1	鹿児島
1	群馬、富山、山梨
1	奈良、鳥取、香川
0	長崎、佐賀、宮崎
0	青森、山形、滋賀
0	和歌山、愛媛、沖縄

(注) 自宅住所による。調査日の手持ち資料で、都道府県がつかめなかった5人を含めて、363人うち男性26人

一九・一一人で、様々な職場を持つ市民の間に運動が広がっていることを示します。一方、会員のほとんどが高校家庭科教師というのは長野・宮城・石川。岩手は中学と高校の家庭科教師一人ずつ。熊本・新潟も現場教師が大半を占めています。これに対し大学教師が多いのは、栃木・徳島・福島・京都・兵庫・福井で、特にはじめの三県は全員大学教師です。小・中・高の現場教師は、運動とは無縁のところには生きているのでしょうか。また、地域によってはこの運動はまだエリート共感しか得られないのでしょうか?…表をながめ

てみると、地域性に関するバロメーターに示されているように思えてくるのは、考え過ぎでしょうか。

現場教師が自分の実践と運動をつなげてとらえ、運動の趣旨が広く市民各層に広がり、男性をも仲間に取り込んでいくことができるよう、目標に五百名突破を掲げ、身近なところから会員の輪を広げていきたいと思います。ただ一人の会員の方、がんばって下さい。ゼロの県にも何とかして入り込みましょう。会員になった方は、会費の納入もお忘れなく!

(半田たつ子)

中教審の新メンバー決まる

教育の基本方針について審議する中央教育審議会は、しばらく活動を休んだような状態になっていましたが、新しいメンバーでまた審議をすすめることになりました。

前文部大臣永井道雄さん、教育課程審議会会長だった高村象平さん、日教組教育制度検討委員会委員長だった梅根悟さんといった、共修運動と縁の深い——といっても結局共修のブレーキにしかならなかった方々も新メンバーに加わっています。

私たちとしては、これからの教育の基本的な課題として「生活教育」や「性差別をなくす教育」について考えていたときたいと思いますが、今まで報道されたところでは、審議会としてそのことを検討しようという姿勢はみられません。

これからぜひ働きかけて行きたいと思えます。
(梶谷典子)

夏の号で紹介したアビール文と、「運営について」と、はがき大の申し込み用紙をいっしょにしたちらしができていますので、入会勧誘のためにご利用下さい。無料。

新世話人に

八百山さん、森さん

四月の総会で二八名の世話人が決定されましたが、その後も世話人になってもよいと申し出て下さる方がありますので、世話人会で検討の結果、次の方々に世話人として活動していただくことになりました。

八百山和子 福井県鯖江市神中町三丁目
共働きをしているのに家事全般を背負わなければならぬことに對する声にならない声を、意見として言える社会にするために会に参加しました。

森 陽子 大阪府豊中市豊南町西5の17の13
男女別の家庭科は、男女の自立を妨げ、差別を再生産している。人間らしい生活をとりたい。りもどす家庭科教育の実現のために努力したい。

大熊信行さん

世話人だった大熊信行さん（東京・創価大教授）は、六月二〇日、劇症肝炎のため米沢の病院で亡くされました。八四才という高齢でありながら、最後まで運動をすゝめようという姿勢を続けられたことに頭が下がります。心から冥福をお祈りしたいと思います。

世話人は二九名に

森さん、八百山さんに加え、大熊さんが亡くなられましたので、本会の世話人は二九名になりました。（残念ながらもまた女性だけになってしまいました。）

なお、夏の号で尾藤操さんを間違えて尾頭操さんとして紹介してしまいました。（５ページ）お詫びして訂正させていただきます。

共修問題

久しぶりにテレビで

NHKテレビの長時間討論で、家庭科共修の問題がとり上げられることになりました。放送は九月二十四日（土）午後七時半から九時までの一時間半、NHK教育テレビ（東京では3チャンネル）です。

本会からは樋口恵子、和田典子の2名が出演します。

出演予定はほかに荻昌弘、上坂冬子、楠本憲吉、佐田彌氏の皆さんです。

ぜひごらんの上、これをきっかけにして話し合いを進めて下さい。また、ご感想などおしらせ下さいますように。（電話でなく郵便で）